

在来草本による緑化手法の検討



防災・メンテナンス基盤研究センター

緑化生態研究室 室長 栗原 正夫 主任研究官 武田 ゆうこ

(キーワード) 在来種、地域生態系、緑化

1. はじめに

道路や公園、河川等の公共事業で生じる裸地は、浸食防止や周辺環境や景観への配慮から早期緑化が求められるため、コストや入手のしやすさから外来牧草による緑化が主流となっている。

外来生物法等を背景に、公共事業で使用する緑化植物についても地域生態系への配慮が求められており、近年、一部ではススキ等の在来植物が利用されるようになってきているが、国外由来の在来植物(中国産のススキ等)が用いられ、日本に生育する系統との遺伝的かく乱が懸念されている。

自然分布	国内のみ 又は国内外	地域由来	遺伝子型	
		地域由来	国内由来	国外由来
国内のみ 又は国内外	国内のみ 又は国内外	地域性緑化植物	在来緑化植物	(外国産) 在来緑化植物
		—	—	—
国外のみ	国外のみ	—	—	外来緑化植物

図 緑化植物の位置づけ

(H18環境省・農水省・国交省による調査報告書)

2. 研究の目的

国総研では、表土利用工、自然侵入促進工、地域性種苗利用工等の地域生態系の保全に配慮した緑化工法に関する研究を行っているが、地域性緑化植物の確保が課題となっている。そのため、望ましい種を選定するための地域性緑化植物リストを作成するとともに、市場生産による供給が困難な種については事業者が自ら又は地域と連携して簡便に採取・生産する手法の開発を目指している。

3. 地域性緑化植物リストの作成

関東地方において良好な植生を構成している二次草原(ススキ型草地、シバ型草地等)と二次林の林床植物の群落内の出現草種を抽出し、分類、自然分布、形態、繁殖生態、開花期、結実期等の基本的な情報の他、レッドリストへの記載、花の美しさ等の観賞性、季語等の文化的価値、生育特性、自然侵入

促進工における出現実績等を整理した地域性緑化植物リストを作成した。

4. 種子採取及び発芽試験

リストの中から複数の群落において出現が確認され、文化的価値や鑑賞性、定着性等に優れた緑化植物として有望と思われる50種について、採取場所、時期、採取方法を検討し、今年度はそのうち20種について種子を採取した。

採取した種子は、綿毛の除去等の精選作業を行った後、無処理及び種に応じた発芽処理(低温湿層)を行い、発芽試験を実施した。

5. 結果及び今後の展開

発芽試験の結果、7種については発芽が見られず、他は発芽率1~63%であった。今後は発芽がみられた種子について播き出し試験を行い、種子生産の可能性について検討する。来年度以降、残り30種についても種子を採取し、発芽試験及び播き出し試験を行う予定である。

在来草本については発芽特性等についての既存知見が少ないが、データを積み重ね、緑化への利用を推進していきたい。



写真-1 袋かけ及び種採取作業



写真-2 発芽試験実施状況